

2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題及び解答例

研究科・専攻 【 仏教学研究科 仏教学専攻 修士課程 】
試験科目 【専門試験 禅学・仏教学一般】

【出題意図】

宗学・禅学分野および仏教学分野に関する問題では、専門的研究を行なう上で、主要な研究課題についての認識及び文献資料、人物、重要語句等の理解度を問う。宗教学分野に関する問題では、宗教学の概念や理論、各宗教の歴史などに関する幅広い基礎知識を問う。

【問題1】 下記の3題の中から1題を選択して論述しなさい。なお、選択した番号を、解答用紙の()内に明記すること。

1. 道元の著述にみられる坐禅による修行観について、①「只管打坐」②「如浄」③「非思量」の語に言及しながら、具体的文献名をあげて論述すること。

【解答例】

「只管打坐」の語は、道元の著述になる『正法眼蔵』や『永平広録』に多数みられるが、いずれも道元の師である如浄の語を引用する文脈の中で説示され、「参禅は身心脱落なり。焼香礼拝念仏修懺看経を用いず、只管に打坐して始めて得たり」とする如浄の説示が、『正法眼蔵』「三昧王三昧」巻などをはじめとする複数の巻において引用・拈提されており、この一節が道元の坐禅による修行観を代表する「只管打坐」の語の典拠である。

道元の著作（『正法眼蔵』・『正法眼蔵随聞記』）の中で、如浄は自ら坐禅を徹底専一に行じ、また日常の説法でも「只管打坐」を修行僧に対して厳格に指導していたと記されている。このことから、道元の坐禅による修行観が、如浄下の参学を通じて確立されたものであると確認できる。如浄の語に基づく道元の説示によれば、「只管打坐」は諸行の中で坐禅を偏重する立場というよりも、一時的な悟証を目的にすることなく、無所得の坐禅にひたすら徹底することを説く内容と受けとめられ、そのことは「只管打坐」と共に挙げられる「身心脱落」の語の理解とも深く関わる。

『三大尊行状記』や『建撕記』などの道元の史伝では、如浄が僧堂内で厳しく坐禅指導する中、如浄の「身心脱落」の語により道元が大悟したと伝えるが、道元の著述中に大悟の経験を示す言及はみられない上に、真福寺本（草案本）『正法眼蔵』「大悟」巻には、如浄が「身心脱落」を「不是待悟為則」と説示していたことを引き、明確に一時的な悟証を求めない如浄の語に参学すべきことを説示している。

また道元が如浄との参問を記録した『宝慶記』では、「只管打坐」の語とともに「身心脱落とは坐禅なり」という如浄の語を載せており、道元が如浄から「只管打坐」の坐禅自体を「身心脱落」と教示されていることがわかる。

以上のことから「身心脱落」は、大悟の経験に基づく語というよりも、如浄の「只管打坐」に基づく坐禅への徹底を示す語として道元に受容されていると理解できる。

道元の坐禅による修行観の意義を考察する上で重要であると指摘されてきたのが、流布本『普勸坐禅儀』に引用される薬山惟儼の「非思量」の話である。『普勸坐禅儀』は道元直筆の天福本（1233年記）から『永平略録』・門鶴本『永平広録』に所収される流布本の間、道元自身による大幅な加筆訂正が行われ、薬山「非思量」の話は流布本に至って取り上げられる。道元が北越に移錫する寛元元年（1243）前後に撰述される、『正法眼蔵』「坐禅箴」・「坐禅儀」にも「非思量」の語が拈提される。流布本『普勸坐禅儀』の修訂においては、薬山「非思量」の話が挿入される他、天福本にあった『禅苑清規』「坐禅儀」から踏襲された坐禅による悟経験の内容に関わる記述が削除され、「作仏を図ること莫れ」・「修証自ずから染汚せず」という語等とともに、悟証を目的にした坐禅への意識的な取り組みを否定する内容が示される。このことから流布本『普勸坐禅儀』における薬山「非思量」話の挿入は、如浄下で参学した「只管打坐」を、悟証を求めず、修証一等の修行観として確立する上で、重要な意義を持つものと考えられる。

2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題及び解答例

2. 大乘仏教における主要な思想的特徴について、従来の部派仏教（いわゆる小乗仏教）との対比を念頭に置きつつ、「菩薩」「空」「仏身論」の3つの視点を含めて、具体的な経典や論書の名を挙げつつ論じなさい。

【出題の意図・評価のポイント】

- **対比の明確性**：部派仏教（阿羅漢・法有・生身）と大乘仏教（菩薩・法空・三身）の相違点が、三つの視点それぞれで論理的に記述されているか。
- **具体的典拠**：『中論』『八千頌般若経』『華嚴経』『法華経』『金光明経』など、各思想を代表する経典・論書名が適切に挙げられているか。
- **用語の正確性**：「自性」「縁起」「法空」「如来寿量品」「三身」などの専門用語を正しく理解し、文脈の中で使用できているか。

【解答例】

大乘仏教は、自己の解脱を第一とする部派仏教に対し、一切衆生の救済を掲げて興隆した運動であり、修行の理想像、存在論、仏陀観において大きな転換を示している。以下、三つの視点からその特徴を論じる。

第一に「菩薩思想」である。有部に代表される部派仏教では、煩惱を断じ自己の解脱を完成させた「阿羅漢」が修行の主要な目標とされたが、大乘仏教は利他行を本質とする「菩薩」を理想に据えた。『八千頌般若経』等の初期般若経典は菩薩が般若波羅蜜を修習する道を説き、『華嚴経』では十地品において菩薩の修行階梯（十地）が体系的に示され、入法界品では善財童子の求道を通じてその実践的な精神が描かれた。部派が菩薩を釈尊の前生という特殊事例に限定したのに対し、大乘はすべての衆生に菩薩道を開いた点に革新性がある。

第二に「空の思想」である。部派（説一切有部）は諸法を分析し、法自体に実存性を認める立場をとった。これに対しナーガールジュナ（龍樹）は『中論』において、一切法は固定的な実体（自性）を欠くという「無自性」を批判的論証によって体系的に示した。

龍樹は縁起と空の同義性を示し、存在理解の根本的な転換をもたらした。この思想は『般若心経』の「色即是空」という命題に凝縮されているように見られる。

3. 第二次世界大戦後とそれ以前における、日本の宗教のあり方の違いについて、国家と宗教の関係から論じなさい。

【評価基準】近代以降の日本における政教関係が、第二次世界大戦終結を境に変化した点について、憲法や法律の変化、宗教団体のあり方の変化、公教育における宗教教育の変化といった視点から、論じることが求められる。憲法・法律、宗教団体、宗教教育どれか1つの視点について変化・違いを十分に論じているか、2つ以上の視点について要点を的確に論じているかで、評価する。具体的には、各視点について以下のような点が論じられているかを評価する。

憲法と法律面での変化については、憲法における信教の自由の位置づけ、宗教団体法と宗教法人法の違い、それらの法律における神社神道や伝統仏教などの宗教および非公認宗教の位置づけ、さらに神道指令の影響などに関する説明が求められる。

宗教団体の変化については、神社神道の神社や神職の位置づけ、靖国神社の位置づけ、伝統仏教などその他の公認された宗教団体や非公認の宗教団体と国家の関係、各教団等の戦争へのかかわり方などの点から説明が求められる。

宗教教育の変化については、公教育における宗教教育の位置づけ、教育勅語や記紀神話の学習、公教育における宗派教育、宗教情操教育、宗教知識教育の違いに関する議論などを踏まえた説明が求められる。

なお、基本的には近代以降の事象についての論述を求める設問ではあるが、前近代の事例を取り上げた場合でも採点対象とする。ただし、国家仏教や神仏習合といった用語を提示するだけでなく、その時代の制度的背景や宗教集団のありかたの実情を踏まえた国家と宗教の関係について詳しく説明していることが求められる。

【問題2】下記の12題の中から7題を選択し、それぞれ150字以内で説明しなさい。なお、選択した番号を、解答用紙の()内に明記すること(解答の順番は問題の順番どおりでなくても構いません)。

- | | | | |
|----------|---------|----------|----------------|
| ① 『宝鏡三昧』 | ② 峨山韶碩 | ③ 皮肉骨髓 | ④ 法堂 |
| ⑤ 悉有仏性 | ⑥ 最澄 | ⑦ 玄奘三蔵 | ⑧ ナーガールジュナ（龍樹） |
| ⑨ シオニズム | ⑩ ムハンマド | ⑪ 見えない宗教 | ⑫ 七福神 |

① 『宝鏡三昧』

2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題及び解答例

【解答例】

中国曹洞宗の祖、洞山良价の撰述とされる。北宋の覚範慧洪が『禅林僧宝伝』曹山章で紹介するにあたって、洞山が曹山本寂への嗣法相続の際に伝授したとされることから、雲巖の撰述ともいわれる。偏・正、明・暗の对待する二相の相即関係（回互不回互）をさまざまな喩によって説く四言の韻文。石頭希遷による『参同契』とともに曹洞宗の宗義を示す典籍として日本の江戸期には多くの禅者によって註解される。

②峨山韶碩

【解答例】

日本曹洞宗の瑩山紹瑾の法嗣で、總持寺二世。大乘寺にて瑩山に参じて法を嗣ぐ。總持寺とともに永光寺の輪住をつとめながら、峨山二十五哲といわれる多くの弟子を教化し、晩年總持寺に置文を残して嗣法門人による輪住制を指示し、曹洞宗教団の全国的発展の礎をなす。その名を冠する著述としては『山雲海月』や数種の仮名法語が確認されている。

③皮肉骨髓

【解答例】

菩提達磨は四人の弟子に対し、それぞれの境界を示した語をもとに、それぞれ皮・肉・骨・髓を得たと評して印証を与えたとされる。達磨の四人の弟子の内、二祖となる慧可は、達磨に「吾が髓を得るが如し」と評される。道元は『正法眼蔵』「葛藤」巻で、見解の表現には優劣はあるとしても、皮・肉・骨・髓のいずれでも、達磨の伝えた仏法に差は無いとする。

④法堂

【解答例】

七堂伽藍の一で、住持が説法する建物。住持は法堂の須弥壇に上って説法し、これを上堂または陸座という。一山の修行僧はここに集まり立地聴法し、住持と問答応酬する。百丈懐海の制したとされる百丈清規（『景德伝灯録』「禅門規式」）では、仏殿よりも法堂を優先し、それは住持が活きた仏として説法することを重んずるためであり、説法は朝夕不定期におこなわれると示される。宋代には五参上堂となり定期的に法堂での説法が行われるようになる。

⑤悉有仏性

【解答例】

一切の衆生は悉く仏性を有するという大乘仏教の根本教義。『大般涅槃経』に説かれ、すべての衆生が成仏の可能性を本来的に具えていることを意味する。法相教学の「五姓各別」説（一部の衆生は成仏できないとする説）とは根本的に対立し、普遍的な成仏の根拠を示す思想として、東アジア仏教に深い影響を与えた。

⑥最澄

【解答例】

日本天台宗の開祖。804年に入唐し、天台・密教・禅・戒の四宗相承を受けた。帰国後、比叡山延暦寺を拠点に大乘戒壇の独立を主張。法相宗の徳一との間で、一乗と三乗のいずれが権・実かをめぐる「三一権実論争」を展開した。鎌倉時代の諸宗祖を輩出する比叡山の基盤を築いた。主著に『顕戒論』『守護国界章』等。

⑦玄奘三蔵

【解答例】

唐代の訳経僧。629年頃にインドへ赴き、ナーランダール僧院で唯識学を中心に諸学を修めた。帰国後、『大般若経』『瑜伽師地論』など膨大な経典を精密に漢訳（新訳）し、中国仏教学の水準を飛躍的に高めた。その業績は旧訳と明確に区別される。西域・インドの地理・歴史・仏教事情を網羅的に記録した『大唐西域記』の口述者でもある。

⑧ナーガールジュナ（龍樹）

2026 年度 駒澤大学大学院 2 月 入学試験問題及び解答例

【解答例】

2 世紀後半から 3 世紀前半頃のインドの思想家で中観派の祖。主著『中論』において、あらゆる存在は縁起しており、固定的な実体（自性）を欠いているという「空」を論理的に体系化した。部派の法実有を帰謬論法によって批判し、大乘仏教の理論的基盤を確立した功績から、後世（特に東アジアで）「八宗の祖」と仰がれる。

⑨ シオニズム

【解答例】

イスラエルの地へのユダヤ人の帰還やユダヤ人国家の再建を目指す思想。言葉の由来は、エルサレムの雅称で旧市街地の南東に位置するシオンの丘。ヨーロッパやロシアでの反ユダヤ主義を背景に、19 世紀ヨーロッパに始まる。政治的シオニズム、社会主義シオニズム、文化的シオニズム、宗教シオニズムなど多様な立場がある。

⑩ ムハンマド

【解答例】 イスラームの伝統を築いた宗教的・政治的指導者であり、イスラームでは神の啓示を伝える最後の預言者とされている。570 年頃にアラビアの都市マッカ（メッカ）で生まれ、40 歳頃に、天使ジブリールを通じて神の啓示を受け、これを説き始める。マディーナに移住後にイスラーム共同体（ウンマ）を設立した。

⑪ 見えない宗教

【解答例】 ドイツの社会学者トーマス・ルックマンが『見えない宗教』（1967）で提示した宗教社会学の理論。宗教を、教会や組織を基盤とした捉え方から切り離し、有機体としての人間が生物学的本性を超越する機能としてとらえ、機能分化が進んだ現代では個人が選択し構築する、社会的には見えにくい私的な宗教が生じているとしている。

⑫ 七福神

【解答例】 恵比寿・大黒天・毘沙門天・弁才天・福祿寿・寿老人・布袋からなる日本の福神信仰。室町時代末期頃から水墨画の竹林七賢図の影響等から 7 柱の神となる。その後、宝船信仰と習合し、江戸時代から正月の七福神詣として流行。神道・仏教・道教等に由来する多様な神々からなり、時代や地域により神々の構成が異なることもある。

2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題及び解答例

研究科・専攻 【 仏教学研究科 仏教学専攻 修士課程 】
試験科目 【 小論文（外国人留学生） 】

【出題意図】

修士課程において仏教学や宗教学を学習・研究に相応しい知識を有しているかを問うため、小論文の形式で基本的な用語の解説を求める。ただし曹洞宗学・禅学、仏教学、宗教学など専攻を異にする者であっても答えられるよう、各分野から基本的な用語を選んで出題する。

【設問】下記の5題の中から3題を選択し、それぞれ300字以内で説明しなさい。なお、選択した番号を、解答用紙の()内に明記すること。(解答の番号は問題の順番どおりでなくてもかまいません)

1 初転法輪 2 阿含経 3 浄土教 4 拈花瞬目 5 神話

〔1〕（初転法輪）

転法輪（法輪を転ず）とは仏陀の説法のこと、初転法輪（初めて法輪を転ず）は仏陀が成道の後、最初に行う説法のこと。釈迦牟尼仏は成道の後、鹿野苑において阿若憍陳如をはじめとする5人の比丘を対象として行ったとされる。『阿含経』や律典の伝えるところに依れば、初転法輪において釈迦牟尼仏は四諦八正道、中道の教説を説いたとされる。釈尊は成道の後、自身が証した法が奥深く知りがたいものであって衆生に説いても理解されないといい説法をためらったが、梵天の勧めにしたがって説法を開始したといういわゆる梵天勧請の物語がよく知られている。

〔2〕（阿含経）

阿含はアーガマの音訳で、伝承された教説の意味、あるいはその教説を集成した聖典のこと。阿含経は釈尊の直説とみなされた経典を含む経蔵のことで、結集の後、各部派がそれぞれ伝承した。パーリ聖典や漢訳の四分律等では経蔵・律蔵・論蔵の三蔵のうち経蔵に長部・中部・相应部・増支部・小部の五種類を伝承しているという。他の漢訳聖典では三蔵のうちの経蔵に長阿含・中阿含・雜阿含・増一阿含の四阿含を含み、パーリ聖典の小部にあたるものを三蔵外の文献として伝承するという。

〔3〕（浄土教）

他仏救済思想の代表的なもので、阿弥陀仏の誓願力（他力）により極楽浄土に往生し成仏することを説く。浄土三部経『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』を根本聖典とする。インドで紀元後1世紀頃に編纂された『無量寿経』『阿弥陀経』に始まり広く展開し、竜樹や世親も浄土往生を論じている。中国には2世紀頃から伝わり、5世紀の廬山慧遠による白蓮社という念仏結社が作られた。その後、曇鸞や善導等により称名念仏を中心とする浄土教が確立された。日本にも早く伝わり、良源や源信などの天台浄土教を中心に種々の浄土教が広まった。平安末鎌倉初期に『選択本願念仏集』を撰じた法然房源空の影響は大きく、門流による諸派・諸宗が展開した。

〔4〕（拈花瞬目）

禅宗が伝承する釈迦牟尼仏から摩訶迦葉への伝法の説。「拈花瞬目、破顔微笑」とも「拈花微笑」と表現される。釈迦牟尼仏は靈鷲山での説法に際し、天人から献じられた華を手にとり瞬きをしたところ、無言のうちに摩訶迦葉のみが微笑し、ここに釈迦牟尼仏の法が摩訶迦葉に伝承されたという故事。一般には第一結集の中心人物で釈尊の言葉を後世に伝えたと言われる摩訶迦葉が、この説では無言のうち釈迦牟尼仏の正法眼藏涅槃妙心を伝承したとされていて、教外別伝を尊ぶ禅宗の立場の優位を示す。また、禅宗の伝法の系譜を摩訶迦葉にまで遡らせるもので禅宗の正統性の根拠として主張される。

〔5〕（神話）

ひとつには口承文芸（口頭伝承）の一つのジャンルとして、現今の秩序を生じさせた起源についての物語が神話と称される。同じ口承文芸のうちでも歴史的物語である伝説、娯楽的性格のつよい昔話（民話）と区別される。宇宙や生命の起源を語るもの、文化の起源を語るもの、王権・国家などの起源を語るもの、神々や英雄が登場する叙事詩的なもの、世界の滅亡（と救済）について語るものなどがある。宗教共同体や民族のアイデンティティ教化にともない、口頭伝承が文字化され聖典化される。また、宗教の儀礼に対し、言語的・理論的側面を神話と捉えることもある。この場合は、儀礼と神話は相互依存の関係にある。

